

「音楽礼拝に寄せて」

中野バプテスト教会 稲垣俊也

▷はじめに

日本では、プロテスタント宣教の150年(カトリックを含めれば460年)の歴史があるにもかかわらず、いまだに日本人の生活世界の風習は、神道や仏教が主流で、残念ながらキリスト教は後塵を拝するに留まっています。これは生活に密着した世界観をキリスト教側から提供できていないからに他なりません。世界観の提供はおろか、むしろ信仰と世界観とは正反対であって、信仰とは世俗的な世界観との関係を断ち切って、超然とした彼方から来る神の声を聴くといった“初期バルト的”な信仰理解がなされてきました。

しかし、神の存在が世界の存在と相違する事柄として切り離されてしまったら、科学はもちろんのこと芸術も道徳も政治もことごとくこの世界においての事柄でありますので、世界の現実はどう対処していくのかという神の世界創造を語ることは困難となりましょう。キリスト教を確固たる人生観・世界観として提示することができないでいることが、日本宣教の不振の一大理由ではないでしょうか。狭い救済観の殻を破り、神道・鎌倉仏教の霊性を超える霊性を人々に提示できたときに、この時代にもキリスト教は日本に浸透するであろうことを我々は気付かねばなりません。

古今東西、キリスト教のみならず宗教は「文化」という衣を纏ってきました。

もちろん、信仰と文化は同義ではありませんが、世の人々は常に宗教を、精神文化に貢献し、こころに実りをもたらす“いとも良きもの”として捉えています。

いたずらに世に迎合するということでは決してありませんが、キリスト教は文化という切り口で「福音」を提供しうることで、福音は間違いなく土着化(インカルチャーレーション)されていきましょう。～インカルチャーレーションは“文化内開花”とも訳せます～

此度、日本バプテスト連盟東京地方連合宣教センターは、イベント的ではない定期的な音楽賛美礼拝を、宣教の要としていく意向を示されました。

分野の違いこそあれ(ゴスペル・クラシック・ニューミュージック、ポップス、民謡等)、世の人はすべからず音楽の愛好者であります。特にこのコロナ禍で、すべてが硬直し閉塞している状況下では、万人共感の「音楽文化」をもって、福音宣教を展開することは、最も有効な手立てであると同時に“喫緊の課題”ではないかと想わされる次第であります。

▷音楽賛美礼拝の実践例

- ・前奏
- ・入祭唱 讃美歌 312 番「いつくしみ深き」
- ・開会祈祷
- ・レクチャー讃美歌 聖歌 396 番「十字架のかげに」
- ・聖書 第一朗読 ローマの信徒への手紙 8 章 28-30 節
福音書朗読 マルコによる福音書 9 章 2-10 節
- ・説教『山頂を目指して』
- ・応答讃美歌 聖歌 396 番「十字架のかげに」清唱

- ・頌栄 讃美歌 541 番「父、御子、御霊の」
- ・祝祷
- ・後奏

音楽賛美礼拝の三大特色といたしまして・・・

◇レクチャー讃美歌～会衆に讃美歌を歌っていただきつつ、歌詞である「みことば」、あるいは「信仰の自由詩」の行間を紐解いてまいります。

◇さらに「説教」によって、みことばを心身に深く刻印する。

◇最後に今一度レクチャー讃美歌を、“清唱”する。

日本語には“清書”という言葉がありますが、それに倣い“清唱”と呼称させていただきます。

(中国には清唱という表現があります)

まさに清書の如く、この日、此の所での、みことばの体験が完成・成就したことを、味わい呼び交わします。

さて此の中で、あまりお耳馴染みではない「レクチャー讃美歌」なるものを以下、解説して参ります。

▷レクチャー讃美歌とは

「新しい歌を主に詠え」～何と清々しく美しいみことばでありましょうか。此のみことばによって多くの教会音楽家が示唆を得て数々の名曲を生み出し、世界中のキリスト者によって此のみことばが詠われてきました。

新しい歌とは、主イエス・キリストの十字架の贖いと復活の息吹に与かり、新しくされた人々の歌であり、新しくしてくださった方に奉げる賛美と感謝の歌であります。

そして「新しい」とは、今このところで、神が私たちを「対話」へとお招きくださっている「新しさ」に、他なりません。

聖書のことばは、紙面に閉じ込められた活字ではなく、今このところで生きて働く“人格者”です。しかも、其の“ことば”は、一方通行の情報伝達ではなく、美しくたおやかな対話をなす“ことのは”であります。

祈りはラテン語で Oratio (オラツィオ) と云いますが、これは「対話」という意味でもあります。

祈りも賛美も、互いに呼び交わし合う美しい「ことのは」に他なりません。

音楽、とりわけ讃美歌はすべからく、「授受」によって構成されています。

讃美歌「慈しみ深き友なるイエス」を例にあげましょう

♪慈しみ深き～人から神への授 ♪友なるイエスは～人の想いをお受けになる神

♪罪とが憂いを～人から神への授 ♪取り去りたもう～人の想いをお受けになる神

例えば「授」役を会衆が担い、「受」役を讃美指導者が担い、交互に歌う。～「会衆」対「讃美指導者の独唱」の応唱形式 (Responsorium)

あるいは「授」役を女声が担い、「受」役を男声諸氏が担い、交互に歌う。～「会衆・女声」対「会衆・男声」の交唱形式 (Antiphonalis)

「レクチャー讃美歌」では、讃美指導者がこのような具体的な解説をしつつ会衆に讃美歌を歌っていただきます。会衆は、歌唱節を重ねるごとに此の授受感を、豊かにたおやかに味わうことと相成りましょう。

幾度も繰り返される歌詞は、神が人と交わされた「愛の授受」の契約は、主イエス・キリストにおいて未来永劫、変わろうはずもないことを表しています。そのことを、毎回の礼拝で「賛美の対話」をもって確認をし、悦び合うことこそ継続的・定期的に礼拝を執行する意義なのであります。

「わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に真実であられる。キリストは御自身を否むことができないからである。」(テモテへの手紙二 2:13)。

▷結び

このように「賛美」とは、神と人、神に繋がる人々が美しい対話をなしている心のあり様です。

音楽は、その対話をより良く成すための架け橋です。

音楽礼拝は、私たちが“みことばを生き”、“神と人とがより良く関わり合っていく”ために 成さずにいられない最高の創造行為の一つではないでしょうか。

新しい音楽礼拝文化を、敬愛するバプテスト教会の皆様方と共に創造できます幸いに、感動を禁じえません。

皆様とご一緒に音楽賛美礼拝にて、主と主のおことばに深くまみえさせていただく日を心待ちに致しております。